

自分発見の旅は続く

立石富男

この講座が始まる時いつも胸に宿るのは、今年はどんな生徒と出会うだろうかという期待感と不安である。既成観念に捉われない若々しい感性や個性との出会いは楽しいし、刺激も受ける。それだけに学業と両立させて最後まで続いてほしいという気持ちにもなるのである。

今年度の参加者は少なかったが、八回の講座はそれなりに充実していた。作品を仕上げることに真剣になっっている姿が清々しく、見ているほうも心地よかった。作品も性を扱った大胆なものがあったし、単にファンタジーでは片付けられないもの、大人の世界を描いたものもあり、もう少し指導できたらもっと良くなるのに、と思うこともしばしばだった。

小説は何をどう書いてもいい自由なジャンルである。だから制約がないように見えるが、じつはその自由が制約となる。ストーリーでも構成でも人物造形でも、読む人を納得させなければならぬからだ。それを言葉で教えるのはなかなか難しい。書き続けて自ら覚えていくしかない。書くことは孤独な作業だ。これはプロでもアマチュアでも同じである。書けない時の苦しみも同じ。つまり、講座生はこの七カ月間プロ体験をしたとも言える。そういうなかで新たな自分を発見したこともあったのではなからうか。自分発見のさまざまな旅は今後も続いていく。この経験をぜひ活かしてほしい。

声が聞こえる

出水沢藍子

今年もさまざまなジャンルの小説が生まれました。日曜の午後、みなさんの豊かな想像力にお付き合ひさせていただくのはとても贅沢なことです。映像が氾濫するこの時代に、文章だけで作品を創り上げる、その面白さと難しさを会得された受講生も多いことでしょう。

一月に講座が終了してから、改めて作品を読み返していると、自作を音読された時のみなさんの声が聞こえ表情が見えてきて、感慨を新たにしているところですよ。

読みながら、三〇年ほど前に、カルチャースクールの小説教室を受講した時のことを思い出しました。講師から「ここ、いいところですねエ」と言われたり「うーん、この表現、どうでしょうねエ」と首を傾げられたりして、一喜一憂した日々。退講してから数年間は、この柔らかな声音が耳に残っていて「うーん」という声が聞こえると手を止めて書き直し「いいですねエ」が聞こえると一気に書き進む、それを繰り返していました。顔は見えねど声は聞こえる。これが薫陶を受けるということかも知れません。

この文芸ゼミナールで時間を共にしたみなさんの耳に、ほんの一瞬でも私の声が聞こえてきたら、こんなにうれしいことはありません。およそ柔らかな声音とは程遠い太目の声ではあります。